

推薦のことば

分かりやすさと科学的レベルを両立させた良書である。

2030年までに、持続可能でより良い世界を目指す国際目標がSDGs (Sustainable Development Goals) だ。17のゴールが示され、「誰一人取り残さない」という理念のもと、すべてのひとが行動して解決することで、「より多くの人がより良い自己実現ができる」ことを目指している。こうした社会の実現のためには、「科学の考え方」が極めて有効だ。

SDGsが問いかける社会課題は2030年で終わるものではない。その先も続く。著者は「科学の考え方」が、こうした社会課題を解くために必要な知恵、『『新しい』『ほんと』を見つけていく方法』であるとする。本書は、その方法論と手順について、初めて読む人にも分かりやすい形で展開している。

表現の特徴は、伝え手（伝（でん）さん）と読み手（受（うけ）さん）、二人の会話により展開している点である。「受さん」になりきるだけでなく、いずれは「伝さん」になるかもしれないと思って読み進めると、著者の思いがよりの確に伝わるだろう。伝さんと受さん両者を実感することで、双方向の視点が理解できる。

本書の方法論は、身近なことを取り上げ、課題設定から仮説構築、文献やデータを使った実証という理系・文系、専門分野を問わない共通の考え方、研究の手順である。その一方で、科学・技術の様々な専門分野において注目すべき対象についても俯瞰的に見渡す。その意図は、自らの専門だけで課題を解決するのは難しく、「違う専門」の人たちに協力を得るといふ異分野連携の視点だろう。同じ言葉であっても、立場や専門の違いによって受け止められ方が異なりうる。そうしたことへの配慮についても述べられている。

私は「プラチナ社会」運動に取り組んでいるが、大いに共感した。日本が先進的に直面する地球環境、超高齢化、地方の衰退といった社会課題に、世界は早晚遭遇する。「科学の考え方」により、様々な専門分野を統合し新たな知見を創造する「知の統合」はSDGsとプラチナ社会に共通する視点だ。

本書は、高校生、大学初年次など、SDGsの時代を生き抜くべき皆さんにふさわしいし、また、こうした人たちを教える教員、あるいは自ら社会課題に向き合おうとする社会人の皆さんなどを対象としている。社会課題の解決に関心を持ち、何かやってみようと思っている皆さんにぜひ手に取っていただきたい。

株式会社 三菱総合研究所理事長
第28代 東京大学総長

小宮山 宏